茨城県・私立

清真学園高校・中学校

課題研究

主体的なゼミ活動で大学進学後も学び続ける生徒を育成

◎全人教育の徹底を教育方針とし、常に心清く、豊かな知性をもって真理を追究する人材の育成を目指す。2007年度、12年度にＳＳＨの指定を受ける。文部科学大臣賞をはじめ、各種表彰やコンクールで顕著な成績を収める。

設立
1978（昭和53）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約200人

12年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京工業大、一橋大、横浜国立大、名古屋大、京都大、大阪大、広島大、茨城県立医療大などに72人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、順天堂大、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ450人が合格。

住所
〒314-0031
茨城県鹿嶋市宮中伏見4448-5

電話
0299-83-1811

Web Site
http://www.seishingakuen.ed.jp/

変革のステップ

背景
◎志望が不明確なまま大学に進学し、入学後に進路変更する卒業生が目立つように。進学実績も伸び悩んでいた
STEP 1

実践
◎SSHへの申請、指定に向けて、文系理系、医療の各分野に渡るゼミ活動を開始
STEP 2

成果
◎将来の志望が明確になる生徒が増加。学ぶ意欲が高まり、コンテストの入賞や進学実績の向上などに表れる
STEP 3

大学進学後に目標を見失わないように

2008・09年度「全国高等学校ビジネスアイディア甲子園」グランプリ、10年・11年度「全国高校生観光甲子園」準グランプリ、11年度「高校生科学技術チャレンジ」文部科学大臣賞――。近年、高校生を対象としたコンテストで目覚ましい成果を挙げている私立の中高一貫校がある。茨城県の清真学園高校・中学校だ。

一連の成果の背景には、9年前に導入したゼミ活動がある。当時、申請を予定していたＳＳＨの教育活動の軸にゼミ活動を据えようと考えたのが始まりだった。内容としては、それまで中学3年生で取り組んでいた卒業研究を発展させ、高校1年生の「総合的な学習の時間」での取り組みとして位置付けた。

生徒の進学意欲や学習意欲の低下という課題も、ゼミ活動を始めた背景の1つだ。一生懸命勉強して志望大に合格したものの進学後に学ぶ意義や目的を見いだせず、他大学を受験し直したり中退したりする卒業生が少なからずいた。大学への期待感の低下から、大学合格実績も停滞する傾向にあったという。進路指導部長の釜田啓市先生は次のように述べる。

「大学での学びに目的意識がなければ、確信を持って進路を選ぶことは出来ません。将来像が描けない生徒ほど、安易に推薦入試

やAO入試を受けようとします。しかし、そうした選択は大学卒業後に大きな借金になって、その生徒に返ってくるでしょう。目的意識を明確にし、受験に向かう意欲、大学入学後も夢に向かって学び続ける意欲を育むのが、ゼミを始めた最大の目的でした」

キャリア教育の視点を取り入れ文系ゼミの活性化を図る

ゼミの導入に当たり、最も留意した点は、内容が理系に偏らないようにすることだ。進路指導副部長の稲葉寿郎先生はこう話す。

「SSH指定校の課題として、理数教科の担当以外から、取り組みへの協力が得られにくいことがあると聞きました。教師も生徒も文理が互いに刺激し合って成長できるよう、文系でもゼミを設けたいと考えました」

文系のゼミを活性化するために取り入れたのが、キャリア教育の視点だ。理系のゼミではSSHの枠組みに沿って自然科学の真理探究をする一方、文系のゼミでは大学卒業後の職業や社会が見える内容を盛り込んだ。公務員志望者のための「行政ゼミ」、医学部・看護学部志望者のための「医療系ゼミ」というように、キャリアの視点を踏まえたゼミが次々と生まれた。

更に、学校全体の取り組みとするために、1～2人の主担当の教師に加えて、引率や文章チェックなどをサポートする教師を各ゼミに配置した。教師全員がかかわり、学校全体で課題や成果を共有する体制が組まれた。

清真学園高校・中学校
釜田啓市 かまだ・けいいち
教職歴、同校赴任歴共に9年。進路指導部長。「どんな仕事でも取り組んでみる。自分に課せられた使命をとことん追求したい」

清真学園高校・中学校
十文字秀行 じゅうもんじ・ひでゆき
教職歴、同校赴任歴共に21年。教育研究部長。「自分のすることに自信を持てる生徒を1人でも多く育てたい」

清真学園高校・中学校
稲葉寿郎 いなば・じゅろう
教職歴20年。同校に赴任して15年目。進路指導副部長。「学校で出来ること、学校が出来ることの可能性を広げたい」

教師の専門性を生かした個性あふれるゼミ

ゼミは、大学のゼミと同じように、研究の大枠を担当教師が決め、それに関心のある生徒が所属する。同校には修士や博士の学位を持つ教師が多く、専門を生かした指導を出来るのが強みだ。医療のように専門の教師がいなくても、その分野に関心のある教師が担当を務める。生物学が専門で「進化学ゼミ」を担当する教育研究部長の十文字秀行先生は次のように話す。

「自分の好きなテーマを生徒と共に研究できるので、楽しみであり、大変さは感じません。ゼミ活動により、その分野の大学の先生に連絡を取って直接話を聞くなど、外とのつながりをつくることも出来ました。都心にある学校ではないので、自分から求めなければ外とのつながりはつくれません。ゼミで学んだことは授業にも生かせると考えています」

ゼミの数は、理系に特化したSSHゼミが10、文系や医療系を中心とした教員主導ゼミが11ある（**図1**）。1年生は必修で、2・3年生も希望者が参加できる。やりたいことがゼミのテーマにない生徒は個人研究を行うが、数は少なく、全体の2割程度だ。

1年間の流れは次のようになる。

図1　2012年度　開講ゼミテーマ名

SSHゼミ
- 進化学
- 科学史
- クリーンエネルギー
- 化学総合
- スターリングエンジン
- 水中生物を通して環境を考える
- サラウンドの研究
- 日常に潜む数理の研究
- アルキメデスの研究
- 数学オリンピック挑戦

教員主導ゼミ
- 名演説に学ぶ英語スピーチ研究
- 起業で学ぶ現代
- 公務員の世界を知ろう（行政ゼミ）
- コーチ学（スポーツ組織論）
- テレビドラマを読みとる
- 医療系
- 音楽史
- 刑法・刑事裁判研究
- 教育を考えよう
- 武士の時代を考える
- 「国際社会で活躍する」とはどういうことか

開講するゼミは1年ごとに教師全員から募集をして決定。毎年18～20ゼミになる
＊学校資料を基に編集部で作成

まず1年生の4月に、生徒の希望に沿って所属するゼミが決まる。定員は担当教師がそれぞれ判断。希望者は全員所属できるゼミもあれば、上限を決め、希望者が定員を上回ったら面接や作文で選抜するゼミもある。

SSHゼミでは、それぞれのゼミのテーマに沿ってゼミ生全員で共同研究を行うのが基本だ。教員主導ゼミでは、「起業」「医療」「刑法」などのゼミテーマの範囲で、生徒が個人、あるいはグループで自由に研究内容を設定する。

「以前の卒業研究では、テーマ設定を全て生徒に任せていたため、『チョコレートについて』『ディズニーランド』など興味・関心の域を出ず、職業や学問への広がりの面で課題がありました。そこで、ゼミでは、まず研究を進める上で必要なその分野の基礎知識を指導するようにしました。こうすることで、生徒の課題設定や研究の進め方にも深みが出るようになりました」（稲葉先生）

研究成果は、9月の文化祭でポスター展示などにより中間発表を行う。その後、SSHゼミは、2月に学外の関係者を招いて発表会を開く。教員主導ゼミでは、1・2月に各ゼミ1人ずつ代表者を決め、管理職も参加する2次審査で5～6人に絞る。そして、3月に学内で行う総合学習発表会で、教師と保護者代表が審査員となって最優秀賞を決める。発表会には中学2・3年生も参加する。堂々と発表する高校生の姿を見せて、よい発表についての視点に触れさせることで刺激を与え、将来のゼミ活動に期待を持たせるためだ（図2）。

図2　総合学習発表会　評価の観点

発表を以下の❶～❹に注意して、5段階評価をする。

- 観点❶　発表内容が論理性があってわかりやすいか。また、その順序がよく組み立てられているか。（論理性、説得力、構成力）
- 観点❷　発表内容が自分の言葉になっているか。また、発表内容にどの程度目新しさがあるか。（独創性、斬新性）
- 観点❸　発表のスピード、声の大きさ、間の取り方、視線など発表の基本ができているか。（パフォーマンス）
- 観点❹　スクリーンに映し出された内容が、見やすいように工夫されているか。（情報伝達力）

5大変良い　4良い　3普通　2もう1歩　1良くない

ゼミの発表会では、審査員以外の聴講者も全員、このシートに記入して提出する。中学生は評価ポイントがどこかを把握でき、自分が高校1年生になってゼミ活動をする際の指針をイメージできる

＊学校資料を基に編集部で作成

教師がどれだけ寄り添うかが生徒の発想を引き出す決め手

ゼミの様子を見てみよう。

稲葉先生が担当する「起業で学ぶ現代」では、自身の専門である近現代史を土台に、戦後復興における起業の役割などを学びながら起業家精神を養う。社会への関心を育むと共に、教科指導では意識させづらい政治・経済と歴史の接点を深めさせたいという思いから開講している。

活動では、生徒の意欲を喚起するために、学外のコンテストを活用している。前期は「全国高校生観光甲子園」（＊1）の出場を目指し、3～4人ずつでチームを組み、「地元地域の観光プラン」など、大会のテーマに応じた企画を立てる。チームによる共同研究とするのは、役割分担や打ち合わせの仕方など、組織で取り組むスキルを学ぶこともゼミ活動のねらいの1つだからだ。後期は「全国高等学校ビジネスアイディア甲子園」（＊2）を目指し、個人研究により商品開発やビジネスモデルの発案をする。この大会では、08・09年と2年連続でグランプリを受賞した。また、「全国高校生観光甲子園」の企画の1つは、「風評被害を吹っ飛ばせ！水郷で〝日本一の朝ごはんを〟」という、鹿嶋の名産・名所を味わえるツアーとして旅行会社によって商品化された。

生徒のアイデアを引き出すコツはどこにあるのだろうか。稲葉先生は「徹底的に生徒を追い詰めること」にあるという。同じアイデアはないか、インターネットなどで徹底的に調べさせ、リサーチの甘さを指摘する。その上で、安藤百福や小倉昌男などの起業家のアイデアを例に発想法を教えたり、日々の生活で感じる不満やニーズについて考えさせたりする。

「教師がどれだけ生徒と一緒に粘り強く考えられるかが重要です。一緒に資料を見なが

＊1　神戸夙川（しゅくがわ）学院大主催
＊2　大阪商業大、毎日新聞社主催

ら『ゼロから夢想するのがビジネスアイデアではない。実態はどうなっている？』というように突っ込みを重ねるのです。こちらが思いもよらないアイデアを生徒が考え出す瞬間が、私の最大の喜びです」（稲葉先生）

正解がない問題に立ち向かえる知的なタフさを身に付けさせたい

医療系ゼミでは「体験」を重視し、出来る限り多く病院や現職医師と接する機会を設ける。

「頭の中で想像している医療現場と現実は違います。実際に足を運び、自分の目で医療の現場を見て、医師や患者から話を聞く体験を重ねることで、医療について深く考えられると思っています」（釜田先生）

写真　教員主導ゼミの１つ「教育を考えよう」で、生徒が小学校を訪問した時の様子。ゼミで活動するうちに、その分野が自分に向いていないと気付く生徒もいるが、進学後のミスマッチをなくす上で重要な気付きであると教師は捉えている

アウトプットも徹底的に行う。病院見学や講演後には、１週間以内に原稿用紙８枚分のレポートを提出させる。

「社会では仕事がきっちり出来て、自ら積極的に動ける人材が必要だと思うからです。社会に山積している、医療倫理のような正解のない問題に対して、どう考えてどう動くのか。自分なりの考えをまとめる方法論や、正解がない問題を考え抜く知的なタフさを身に付けてほしいと思います」（釜田先生）

勉強や部活動だけではない生徒が輝けるもう１つの道

ＳＳＨゼミでは、実験・検証、文献調査によって、真理を実証的に探究する。十文字先生の進化学ゼミでは、アメリカの大学で教科書として使われている書籍で学び、花や昆虫の観察を行い、最新の進化学に触れる。

「ゼミで自分の関心を徹底的に追究し、力を発揮する生徒は珍しくありません。やりたいことが見付かり、大学でその研究を深めるために、授業への意欲が高まる生徒もいます。また、学外の大会で受賞したり、海外で研究発表したりする生徒もいて、周りの生徒へのよい刺激になっています。授業や部活動だけでなく、生徒が輝ける場をいろいろ提供できる学校でありたいと思います」（十文字先生）

生徒の意欲が高まることで、進学実績も向上。医療系ゼミでは、ゼミを通じた卒業生とのつながりも、進学実績に良い影響を与えている。

このような取り組みが組織として続けられるのは、部活動の顧問をはじめ教師全体が協力的なことに加え、新しい試みを受け入れる雰囲気があるからだと、十文字先生は話す。

「受験に向かえる学力と共に、学問の面白さを知り、人生を切り拓く力を身に付けた自立した生徒を育てたいという本校の理念に教師が共感しており、その上で各教師が好きなテーマに好きなように取り組める体制であることが、継続の要因の１つだと思います」

新たな挑戦も始まりつつある。臨海工業地帯にある立地を生かした企業との連携だ。現在、経済同友会の協力により、大手企業による講演会などを行っており、近い将来、企業の研究員や地域の人材と連携するという案もある。

「この地域は、戦後に開発が始まるまでは砂丘地帯であり、首都圏に最も近いフロンティアでした。このフロンティア精神を持って、地元に新しい道を拓く人材を育成することが本校の使命であり、地元の期待でもあります。高校は、卒業後に生徒がどこへでも飛び立てる滑走路のような存在でありたい。そのために、教師が率先して道を拓くという意識を持ち、新しいアイデアをどんどん形にしていきたいと思っています」（稲葉先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2010年６月号指導変革の軌跡「**新潟県立高田高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME ＞ 情報誌ライブラリ（高校向け）